

平和行事記念式典（広島市）に参加して

60代 女性

広島へ行くことならいつでもできますが、「原爆の広島」へは今回しかないという気持ちで参加させていただきました。

初日は原爆ドーム・慰霊碑へ行きました。写真では繰り返し見た原爆ドームをはじめて間近で見た時は本当に感無量でした。これは原爆禁止を世界に訴える記念碑として永久に残していかなければならないと思いました。続いて新しくなった平和記念資料館（原爆資料館）を見学しましたが、改めて戦争の惨禍に身の引き締まる思いでした。

翌日の原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式では、思いがけず一人一人が献花するというので、私の順番がきたときにはとてもドキドキしました。

現地で一生懸命に説明し、いろいろお世話にしてくださった広島ボランティアガイドの方たちの姿には心うたれるものがありました。

これを機会に平和とは何かということを考えていこうと思いました。

平和への感謝、責任、そして、覚悟

50代 女性

例年より随分遅れて梅雨が明け、まさに暑さのピークとなった頃に、「平和行事参加の旅」に参加しました。

修学旅行で長崎を訪れたことはありましたが、広島は、今回の旅で初めて訪れました。

広島駅に到着し、ホテルにチェックインを済ませると、今年の春にリニューアルオープンしたばかりの平和記念資料館へ向かいます。

初めて訪れた広島市街の印象は、「豊かな水路と緑に囲まれて、その中に人々の暮らしがあり、とても美しいところ」というものでした。

特に、1日目の8月5日は、晴れ渡った空の下、木々の緑、そして川の流れが、ひととき豊かな生命力を反映しているように見えました。

平和記念資料館で、原爆の被害にあった方々の写真や、身につけていた衣類、カバン、その他、大切にしていた遺品の数々の展示を見て行くうちに、74年前の原爆投下時にも、同じように暑い夏の盛りで、真っ青に晴れ渡った空の下、今こうして広島を訪れている私たちと同じ様に、未来に対して様々な思いを抱いている人たちの生命が、一瞬にして奪われたのだという事実が、確かな重みを持って、胸の内に広がって行きました。

「戦争はいけない、平和を守らなくては」と、これまでも常に思ってきたものの、終戦後に生まれ、原爆がどういうものかを直接には目にする機会なく育ってきた私にとっては、やはり「戦争」というのは、過去の出来事でした。

自分となんら変わらない、市民の方々の未来を、一瞬にして奪ってしまった原爆。時間が経っても、その影響は、様々なところに影を落として存在し続けていることを知りました。

ホテルでの夕食の際に、私は、現在の広島の良い街並みと、その場所に原爆が落とされたのだという事実のギャップを思うと、街の美しさが余計に胸に刺さる気がする感想を述べました。

ゆったりと流れる元安川のほとりに佇む原爆ドームの姿、そして、海外から来られた方々も大勢集まり、原爆ドームをカメラに収めているところを一見すると、まるで、ヨーロッパの観光地にでも来たのかと錯覚してしまいそうな気がしたのです。

でも、その美しい風景、そして、今のこの平和な時間は、戦争で犠牲になった無数の方々の魂が、そして、一瞬にして全てが失われ、死の街と化した広島を、一から立て直してきた市民の方々が、これまで守ってくれたものです。

この美しい風景を美しいまま、平和な時間を平和なまま、未来へ継承していくことができる様、自分が伝えられることは、未来へ伝えて行こうと思いました。

翌日6日の平和祈念式典の朝、近づきつつある台風の影響で、式典の日としては珍しく、雨が降りました。

式典開始後、徐々に強まる雨足でしたが、その中で放たれた鳩の群れが、力強く、大空へ羽ばたいて行きました。

慰霊の碑に手を合わせ、初めてこの地に立たせていただいた感謝を捧げ、未来を担っている者の一人として、どんなことがあっても平和を守って行く責任、覚悟を新たにしました。

いつかは訪れるべきところとして、広島は常に意識の中にあったものの、自分一人では、なかなか行動に移すに至りませんでした。

小金井市の平和行事参加の旅に参加させていただき、多くの学びや気づきに富んだ、大変貴重な時間を過ごさせて頂きました。

来年以降も、ますます多くの方が参加され、平和に対する思いを深めていただけることを願ってやみません。

本当にありがとうございました。

平和行事に参加して

70代 男性

昭和21年、私の生まれた年です。したがって私は戦後生れということになり、福島県の片田舎で高校卒業時まで過ごしました。当時は、戦争に関する情報が乏しく、原子爆弾の惨劇を知ったのは写真によってであり、きのこ雲と言われるものや原爆ドームを目にはしたものの、広島や長崎を知らない私にとっては他国で起こったように感じていました。成人後生活様式の変化からテレビを観る機会が多くなり、20代半ばでテレビを持てるようになって広島を知り長崎を知り第二次世界大戦の惨劇を知りました。

10数年前に孫と一緒に広島平和記念資料館を見学しました。あの時の衝撃は大きかったのですが、孫の目に触れさせたくないようにした展示品があったり、私自身も目にしたくない展示品などもあり、深く思いを止めることは出来ませんでした。今回再びリニューアルされた資料館を訪れる機会をいただき、改めて展示品の数々を見て、地球上の何処にあってもこのような惨劇を起こしてはならないと深く思いましたし、平和についても考えてみる事が出来ました。

私は小さい頃から兵隊は嫌いでした。それは、私の父は徴兵されて戦地に赴き、主に炊事を担当していたそうです。酒を飲めなかった父は出征により炊事をする傍ら酒を覚え、帰還後、疲れや生活上の不満を紛らわすために酒の力を借りるようになり、これが母や子供たちにとてつもなく嫌な思いとして残り、酒＝兵隊＝嫌いとなったわけです。

戦争の惨劇は部分的には自然災害でも見られることですが、災害は気象変動によって起こることから人知ではいかんともしがたいが、戦争は人間が引き起こす

ものです。その人間はまた他人の幸福をも考えられます。他人の幸福を考えられる人間はこうしたら人間は悲惨になる、不幸になる、だから止めようとする事も出来ます。つまり、他人の犠牲の上に自分の幸福は築かない。このような考えを持って行動していく必要があるのではないのでしょうか。

広島市長は式典で「あのようなことを後世の人たちに体験させてはならない。私たちのこの苦痛は、もう私たちだけでよい。」という言葉を紹介していました。この言葉は、当時十八歳だった男性の言葉です。被爆体験者が高齢化し、当時のことを知っている人が減っていく中、被爆体験の語りべをしている全ての人がこの事を思っ活動しているそうです。

僕はこれまで、原爆を投下された当時のことを、テレビや教科書でしか学んできませんでした。資料館には、学んできた物がそのまま展示してあると思っていました。しかし、展示してあるものは全て生々しく、見ただけで当時の状況がどれだけ恐ろしかったかがわかるものでした。写真は、いままで見た中で一番惨たらしいものが周りの雰囲気とあわさり、より恐怖を感じました。当時使われていた物の展示は、もともと何だったかすらわからない物も多く、今では考えられないような状態でした。この二つだけでも原爆のおそろしさがよくわかりましたが、原爆のおそろしいところは、その威力だけではありません。被爆者の話では、生き延びた人の多くは被爆してしまい、そのまま命をおとってしまう人や、症状がでていないが、被爆したというだけで差別された人も多かったそうです。

僕達の世代は、他の世代とくらべて、戦争や原爆への意識がうすくなっています。流行のゲームは、まるで戦争を再現したようなものが多いです。僕はこの見学で学んできた事を胸に、被爆体験者の方々が語ってくれた事が二度とおこらないように、なにかできることがないか考えていきたいです。

広島に行って

40代 男性

この度、思いもよらないきっかけで、小金井市主催の「平和行事参加の旅」に参加することになりました。平和記念式典はテレビ等で見たことはありましたが、その場に参加出来るというのは大変貴重な体験だと思いました。

昭和20年8月6日午前8時15分。

人類史上最初の原子爆弾が、広島に投下され、その年の12月末までに約14万人が亡くなったと言われていています。情報としては知っておりましたが、70年以上前の話です、どこか遠い国の話とも思っていました。

しかし、初めて平和記念資料館に入って被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や絵などを見たとき、急にリアリティを感じました。ああ、ここにある服を着ていた人は亡くなったのかと。階段に焼き付いた人の影を見たとき、この人は何を思い、何を見ていたのか。怖かったのではないのか、死ぬことに悔しかったのではないだろうか。

また、資料館の中には被爆者証言ビデオが見れるコーナーがあり、多くの人の当時の生々しい証言を聞くことができました。当時、生き残った者達が、どのように地獄のようになった広島で生き残り、救助活動をしたか、何が出来たのか。話に引き込まれ、時間が経つのも忘れていました。印象的だったのが、皆して、「戦争は悲惨だ、決して戦争をしちゃいけない」と語っていることです。体験者だから語れるリアリティ、戦争を知らない私にとっても重い言葉です。

原爆ドームを目の前にした時、セミの声を聴きながら「あの時もこんな感じだったのかな」と思い、ふと急に背筋が冷え、思わず空を見上げてしまいました。綺麗な空でしたが、当時は真っ黒になったそうです。

戦争は悲惨です、何もかもを破壊し、全てを奪います。家族も、友人も、思い出も、故郷も。軍人も市民も関係なく。戦争を知らない我々は、戦争という化け物を理解せず、解決手段の一つとして軽々しく選択肢の一つに挙げようとしています。しかし、犠牲になるのは殆ど市民です。

平和な世界の実現に、自分には何が出来るか、何を思うか、すごく考えさせられた旅でした。

平和行事参加の旅

10代 男性

1945年に祖父が広島市の学校に通っていたことを、私は中学二年生のときに母から聞きました。勤労奉仕で投下の前日までそこに居ましたが、たまたまその日は実家に帰省していて助かったようです。それを知り、身近なところにそんな人が居たんだと驚きました。なので平和行事参加の旅に誘われた時も行ってみるのもいいかなと思いました。

実際に原爆にまつわる色々な場所に行ってみると想像していたより多くのことを考えさせられました。平和記念資料館で見た絵は、写真で表せない描いた人の感情がこめられているようで、印象に残っています。辛い、悲しい、だけでは表せないような複雑なものを作者は伝えなかったんだろうと思いました。

式典や資料館で見たり聞いたりしたことはほとんど知識としては頭に入っていたことでした。ですが、知っているだけでは分からない広島で何が起きたかというところを感じることができたと思います。しかし同時に、完全に原爆の恐ろしさを理解することもできないかもしれないと思いました。原爆の被害者と同じ物や風景を見ても、その人が感じた「痛み」や「絶望」を理解することは、平和な社会で生きている自分には到底できるものではないと感じました。でもだからこそ、少しでもそれを伝えるために努力していかなくてはいけないと分かりました。これから生きていくなかで平和の尊さや大切さを忘れずにいようと思います。